

親鸞の顕彰隱密の積義について

蓑 島 和 潤

顕彰隱密の積義（隱顕義）とは、親鸞の名著教行信証の第六卷方便化身土巻で示す所謂、「一問。大本三心、与觀經三心云何。答。依釈家之意、按無量寺仏觀經者、有顕彰隱密義云々」と設問し展開する大經、觀經、阿弥陀經の三經三心の一異を詳論する積義を指している。この隱顕義は善導、法然と伝承された廢立義の徹底深化であり、二双四重の教判に具体的内容を付与するものと意義付けられている。しかし従来宗学の上で概念規定を始めとしてその意義の理解について異説が多い。事実隱顕義は一見して明らかになく錯綜した複雑で微妙な論証になっている。多岐に亙る問題のうち二三を取りあげてその意義について説明を試みてみたい。

この積義は冒頭の文及び結語の「三經大綱雖有顕彰隱密之義、彰信心為能入……今按三經、皆以金剛真心為最要」という如く信の問題が主眼である。この信の扱いについては觀經の隱顕を論じた後で論究する阿弥陀經の一心を解釈する地点に至つて明瞭になる。即ち定散二善―觀想と道德に代表され

る一切の行の無功を知つて捨て、善本徳本の名号をえらびとり執持することであるとすが、この名号執持に於ける自力一心―執心自力、疑惑仏智―の嚴密な分析省察を指している。一心を第十八願の一心と弁別して、第廿願当面の立場からの意味を明し（顯義）、次に第十八願の立場から「回向返照」することによつて第廿願の一心を明す（隱彰義）をいうこの第八願から第廿願を説明する視点が、觀經の隱顕を示す多くの個処から三心を取りあげ考察しそれによつて第十九願の三心を説明する視点として設定されていることが逆推されるのである。それは極めて複雑な解釈の手續を経ている訳である。

この名号執持の問題をめぐつて真実の批判の依拠が行から信へと転換されているのを知ることができる。一心について論註の如実修行相応、三信の展転相成の義に依つて一層精密に考察されている。

却説隱顕義は第十九願の至心・発願・欲生の三心を觀經に説く至誠心・深心・回向発願心に依つて解釈することが問題

の核心になつており、第十九願の三心を觀經の三心と置換することに依つてその相応を見、前者の三心の本質を解明するといふ、この置換の手續と方法を指している。今この問題を扱う前に、先に次のことに触れておこう。化身土巻上巻は、第十九願要門釈—隱顯義—第廿願真門釈—三願転入の自督—三時思想となつており、三願転入を課題として構成されそれが歸入統合点に位置していることが窺われる。隱顯義はこの三願転入の各願位の当面の立場に於ける志向勸励—顯義—と、第十八願からの回向返照によるその否定廢捨と眞實の立場への指示—隱彰義—という二重の作用からなつてゐる。因みに三願転入の宗教的精神の自覚向上の過程は主体の側からなす一方向的究めではない。出発点としての第十九願の立場が弥陀の本願に基づく発心（欣求真実）に始まるものである如く、一般的には超越者・無限者に向けてなされる係わりから生ずる自覚現象と云われる、兩者の相互の自己否定を媒介とする作用の交流の上に成立している。親鸞はこの信に於る體驗の成立の事實を値過ともいい、不可思議とも表わしている。なお転入の経路について転入の側から云えば十九↓廿↓十八と次第しているが、自督の上からは十八↓十九↓廿となり、廿願は十八願から開出されるもので十八願に対してのみ存在意味を持ち、十九願とは直接連続するものではない。そして三願転入は自督に云う「特今」と「爰久」という一見矛盾

盾する兩者の相即の立場で把握されているものであろう。

ところで化身土巻について従来多くは、教行信証の眞實前五巻に対して簡非の巻とし廢捨の為に説示するもの、誘引の義としての権用は仏の側に於いて語るべく衆生趣入の側からは妄りに語るべきでないとし、眞實の巻の前提として漸用還廢と意義付けられている。そして方便の願は未熟の機を誘引せんが為に不本意に施設したものと見る。眞實の巻と方便の巻とは密接な内的連関を持ち動的に把握されなければならぬ訳であるが、これらの見解には三願転入を親鸞の求道の苦心の事蹟として讃仰するにも拘らず靜的なそして排折するに努める逆の悟性的な把握に止り、信の形成過程の意義を充分に見極めずに来たのではないかと窺うのである。このことは隱顯義の解釈に反映している。従つて三願転入を事實とせず自身に寄せて法の廢立を示すものとする寄顯説はとらない。

方便の意義は大乗仏教で、特に唯識の方面で精察され展開されたといわれているが、それは言説を超えた眞諦が言説生死の相對的世俗のうちに自己を顯現し世俗諦として示し、このことによつて世俗を眞諦へと導き歸せしめるといふときの通路の施設の意義を持ち、いわば仏から衆生へ、衆生から仏へと至る通路の施設である。円環的向上作用に於いてなされるこのことが眞實の自己展開であり自己完成であるとす。

その具体化である竜樹の因施設、仮の思想は彼の後一層深化

展開されていつたという。化身土卷はこの意義を担うものとして独自の体験吟味による把握でなかつたかと思惟される。

ここで先きの三心の問題に戻ろう。要門釈を結んで「観經定散諸機、極重惡人勸勵唯稱弥陀也。濁世道俗、善自思量已能也。応知。」と結論している。要門釈の理解は隱顯義に至つて充全のものとなるが、ここには死への不安（無常の問題）と発心に始まり罪障の自覚へという推移があり、即ち定散二善に依る生死解脱の志向の蹉跌絶望を契機として極重惡の自覺に至り弥陀大悲に依る救済へと方向している。親鸞が觀經の上に洞察した視点である。第十九願の修諸功德を定散二善として、それが宗教的意味を持つのは至心発願することに基づくとする。結論は顯の義から云えば如来異の方便、欣慕の善根、隱彰義からはその不能不堪を体験して「其本の罪を識りて深く自ら悔責」して弥陀の名号に帰せよと勧める、所謂廿願への転入である。三心釈を検討すると至誠心と機の深信、法の深信と回向発願心との間に自己矛盾が含まれている。この矛盾の内在については曾我量深氏の『伝統と己証』の深い思索に譲る。親鸞は三心釈を二種深信を基軸にして色説している。これは至誠心に於ける菩薩の因中の行の真実清淨さと対比された衆生の真摯な真実心の追求に対する深刻な内省から生れたものといえよう。真実心の要請策励と自己の罪障性の露呈という葛藤分裂に逢着し、策励―自心建立それ自体

親鸞の顯彰隱密の釈義について（養 島）

罪障そのものという自覺に徹底し機の深信へと歸す。「真実心の策励訓戒の文から罪障の懺悔の文」へと色説訓み変られた謂である。要請策励は顯の義、第十九願に相当する。善導の觀經の三心の把握については至誠心を前提とし深心に基づき回向発願し淨土往生を願求するという、この回向発願心に於ける欣慕真実が主題としてあり、親鸞は三心釈を解釈する際に、一方ではこのことが如何に成り行くかを自己の体験から即ち三願転入の観点から洞察分析しているといえよう。三心釈に対し周知の如く二つの方法を用いて対応している。一は原文の訓み変えであり、一は削除・切断してその各文が十配当するというものである。又この点について愚禿鈔では三心の各々に対して自利・利他、自力・他力の二面に弁別して考察している。親鸞のこの分析省察の手續の跡を辿り解きほぐしながら検討し推求することは、それはこれ迄触れてきた如く彼の体験の内容とそれに基づく思想形成の跡を知ることには他ならない訳であるが、今は一切割愛しなければならぬ。この解釈の手續即ち隱顯義は真実信他力回向の信への過程の方法と原理を刻印したところの、長き内省と思索を要した微妙で困難な作業であつたといふことができる。

(1) この他、淨土文類聚鈔に「隱顯」の語句を見ることができ。顯彰隱密義の用語は顯義、彰隱密（隱彰）義と二分して理解するのが適切に思われる。（参考文献省略略）